

目を上げて畑を見なさい

ヨハネの福音書 4章 27-38節

はじめに

イエス様とサマリアの女の出会いの出来事を学んでいます。このサマリアの女は、過去に五人の男と結婚しましたが、すべてうまくいわずに離婚してしまいました。そして現在は、六人目の男と結婚はせずに同棲しているという状態でした。彼女は、昼間の日差しが暑い時間に水がめを担いで、「ヤコブの井戸」に水を汲みに来ました。普通の人が水を汲みに来るのは、暑い日差しを避けた早朝か夕方だったようです。多くの説教者は、彼女は人目を避けて昼間に水を汲みに来たのではないかと言います。彼女の私生活は、サマリアの人々にも軽蔑されていたと考えられるからです。

しかし彼女は、「ヤコブの井戸」でイエス様に会います。そこでイエス様から、「生ける水」について、また「まことの礼拝」についての話を聞きます。また彼女の隠したい過去や現在の結婚生活を、イエス様にすべて言い当てられてしまいます。そこで彼女は、イエス様こそ「キリスト」「メシア」ではないかと考えるようになります。イエス様も彼女に、「あなたと話しているこのわたしがそれです」と、御自身が「キリスト」「メシア」であると宣言されたのです。

1. サマリアの女の変化と弟子たちの無関心

イエス様とサマリアの女が、そのような対話をしている時、弟子たちがイエス様のもとに帰って来ました。彼らは、食べ物を買いにサマリアの町に出かけていたのです。彼らが帰って来ると、イエス様がサマリアの女と対話しているので、ビックリするのです。なぜビックリするのかというと、一つは、ユダヤ人とサマリア人は互いに敵対していたからです。ユダヤ人とサマリア人は、もともと一つの民族でしたが、サマリア人は異教の神々を受け入れたり、異教徒と結婚したりしたので、ユダヤ人からは汚れた人々と見られ、軽蔑されていたのです。もう一つは、当時の宗教指導者は、女性と関わりを持たなかったからです。特に外で女性と話すことは、たとえ自分の妻であっても禁じられていたのです。

そういう意味で、弟子たちは、イエス様とサマリアの女が対話をしているのを見てビックリしたのですけれど、彼らは彼女に「何を求めですか」とも、イエス様に「なぜ彼女と話しておられるのですか」とも聞かなかつたと 27 節に書かれています。弟子たちは、この出来事に触れなかったのです。弟子たちは、サマリアの女に無関心であったからではないでしょうか。

彼女は、弟子たちが帰って来ると、水がめを置いたままサマリアの町に行って、人々にこう言うのです。「来て、見てください。私がしたことを、すべて私に話した人がいます。もしかすると、

この方がキリストなのでしょうか」。彼女は、サマリアの人々にイエス様を伝えるのです。これまで人目を避けていた彼女が、人々に自分から話しかけるようになったのです。ここに、彼女の変化を見ることができます。また、彼女のイエス様に出会った喜びを見ることができます。すると、彼女の言葉を聞いたサマリアの人々は、次から次へとイエス様のもとにやって来るのです。来週学ぶ 39-42 節には、彼女の言葉を聞いてイエス様のもとにやって来た多くの人々が、イエス様を信じたと書かれています。彼女を通して、サマリアの多くの人々がイエス様を信じ、「生ける水」「聖霊」「永遠のいのち」を与えられ、「まことの神」に出会い、「まことの礼拝」へと導かれていったのです。

2. 私たちが知らない食べ物

31 節からは、彼女がサマリアの町でイエス様を伝えている間に起きた、イエス様と弟子たちとの対話が書かれています。弟子たちが買い物から帰って来て、「**先生、食事をしてください**」と言うと、イエス様は彼らにこう言われます。「**わたしには、あなたがたの知らない食べ物があります**」。この言葉を聞くと、弟子たちははっきり、自分たちが買い物に行っている間に、誰かがイエス様に食べ物を持って来てくれたのだと思ったのです。しかしイエス様は、こう言われます。「**わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです**」。

イエス様は、弟子たちが「知らない食べ物」について語られます。それは、「神様のみこころを行い、そのわざを成し遂げる」という食べ物です。食べ物は、私たちに活力を与え、エネルギーを与えます。また私たちを健康にし、喜びを与えてくれます。イエス様は、「神様のみこころを行い、そのわざを成し遂げる」ことこそ、自分に活力とエネルギーを与え、自分を健康にし、喜びを与えるものなのだとされるのです。

旧約聖書の申命記 8：3 には、「**人はパンだけで生きるのではなく、人は主の御口から出るすべてのことばで生きる**」(申命記 8:3)とありますが、私たち人間は食べ物だけでは、本当の意味で生きていくことはできません。食べ物だけでは、私たち人間に生き活きとしたエネルギーや健康や喜びを与えることはできません。比較的食べ物に困らない先進国と言われている国々の人が、必ずしも生き活きとして、健康で、喜びに満たされているとは限りません。私たち人間にとって、食べ物は大切なものです。しかし食べ物だけでは、人は幸せには生きられないのだと思います。私たちは、イエス様が教えられた「私たちが知らない食べ物」を食べなければ、本当の意味で生きること、エネルギーに満ちて生き活きと、喜びに満たされて生きることにはできないのだと思います。

では「私たちが知らない食べ物」とは何でしょうか。それは、「私たちが遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げること」です。イエス様は、神様によって天から遣わされた神の子です。私たちは「遣わされている」という感覚を持っているのでしょうか。この地上で生きていること、そのものを「遣わされている」感覚で生きているのでしょうか。私たちは、この地上で生まれ、育ち、今に至ります。それゆえに「遣わされている」という感覚

を持ちにくいかもしれませんが。しかしイエス様も、この地上で生まれ、育ち、宣教を始められました。もちろんイエス様は、聖霊によって処女マリアから生まれたのですが、私たちと同じように、赤ちゃんの時代、子ども時代、青年の時代を経験されて、宣教を始められたのです。それでもイエス様は、ご自身が神様によって天から遣わされているという明確な自覚を持っていたのです。

私たちクリスチャンの国籍は、天にあると言われていています（ピリピ 3：20）。また私たちは、天に故郷を持っていて、地上では旅人であり寄留者であると言われていています（ヘブル 11：13-16）。その意味で私たちは、イエス様と同じように、神様によって天から遣わされていると言えるのではないのでしょうか。では私たちは、何のために遣わされているのでしょうか。それは、「神様のみこころを行い、それを成し遂げるため」です。私たち一人ひとりの人生には、神様から与えられた使命があります。それを行い、それを成し遂げることが、私たちの人生に力と喜びを与えてくれるのです。言い換えれば、人生の充実感と幸せと言えるでしょう。

多くの方は、イエス様が教えたこの「まことの食べ物」を知りません。ですから神様のみこころではなく、自分の心を満たそうとします。自分の夢や自己実現のために人生を使います。その結果、物質的な食べ物は満たされ、お腹も満たされるかもしれませんが、魂や心は満たされないのです。自分のために生きても、自分の魂や心は満たすことはできないのです。神様のみこころに生きて、神様から与えられた使命に生きる時に、私たちの魂や心は初めて満たされていくのではないのでしょうか。

現代の若者は、夢や希望を持ちにくいと言われる。自分には夢がない、やりたいことが分からないというのが、多くの若者の姿です。与えられた人生をどう生きればよいのかが分からないのです。自分の夢や自己実現のために生きることすらできないのが、多くの若者の姿と言えるでしょう。そのような若者たちにも、神様はみこころを持っておられるのではないのでしょうか。一人ひとりに、この地上で成し遂げるべき使命を与えておられるのではないのでしょうか。もし現代の若者が、イエス様に会い、彼らの知らない「まことの食べ物」を知ることができれば、彼らもまたこれから先の人生を、力と喜びに満たされて、また充実感と幸せに満たされて生きていくことができるのではないのでしょうか。

3. 蒔く者と刈る者

さてイエス様は、35-37 節で二つの諺を使って、弟子たちを教えられます。一つ目の諺は、「**まだ四カ月あって、それから刈り入れだ**」という諺です。これは、種を蒔いてから刈り入れまで、四か月間は待たなければならないという諺です。つまり、今はまだ収穫の時ではないという意味です。しかしイエス様は、「**目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに至る実を集めています**」と言われます。弟子たちは、今は「まだ」収穫の時ではないと考えていたようですが、イエス様は、今は「すでに」収穫の時だと考えていたのです。ここでの収穫とは、「永遠のいのちに至る実を集め

ること」、つまり人々の救いです。

この時、多くのサマリア人がイエス様のもとに集まって来て、イエス様を信じようとしていたのです。一人のサマリアの女を通して、多くのサマリア人が救われようとしていたのです。この光景を見て、イエス様は、今はまさに収穫の時だと言われたのです。しかし弟子たちは、今はまだ収穫の時ではないと考えたのです。彼らは、サマリアの女に無関心でした。買い物から帰って来て、イエス様とサマリアの女が対話をしていても、その出来事に触れることもなかったのです。彼らは、サマリア人が救われるとは考えていなかったのではないかと思います。しかし神様の畑を見上げれば、救われるべきサマリア人が多くいたのです。

もう一つの諺が 37 節にあります。「**一人が種を蒔き、ほかの者が刈り入れる**」という諺です。種を蒔いたその人が、刈り入れもするのが理想ですが、種を蒔いたその人が必ずしも刈り入れるわけではなく、他の人が刈り入れる場合もあるということです。詩篇 126:5-6 には、こういう言葉があります。「**涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取る。種入れを抱え、泣きながら出て行く者は、束を抱え、喜び叫びながら帰って来る**」。種を蒔く人には「涙」があり、刈り入れをする人には「喜び」があるのです。刈り入れをする人は、報酬があるので「喜び」がありますが、種を蒔く人は、報酬がなくただ労苦だけがあるので「涙」なのです。イエス様は、教会の伝道も、種を蒔く人が必ずしも刈り入れもするわけではない、「収穫する人」もいれば、「種を蒔く人」もいる、そういう役割分担があるのだと教えられているのです。イエス様は 38 節で、「**わたしはあなたがたを、自分たちが労苦したのでないものを刈り入れるために遣わされました。ほかの者たちが労苦し、あなたがたがその労苦の実にあずかっているのです**」と言われました。弟子たちは、「収穫する」ためにイエス様に選ばれた人たちでした。イエス様がある時、「**収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるのように祈りなさい**」(マタイ 9:37-38)と言われて、弟子たちを伝道旅行に遣わされました。まさに弟子たちは、人々を救いの決心へと導く「収穫の働き人」だったのです。しかし、彼らの「収穫」の背後には、種を蒔いて「労苦」してくれた人たちがいたのです。それは、旧約時代の預言者かもしれませんが、イエス様かもしれません。

教会の伝道にも、「種を蒔く人」と「収穫する人」の役割分担があるのではないのでしょうか。自分で種を蒔いて、自分で収穫するというのは、ほとんどないのではないのでしょうか。誰かが教会に訪ねて来る時、「小さい頃、教会学校に通っていました」とか「学生時代にミッションスクールに通っていました」とか「三浦綾子の本を読んで教会に行ってみたくなりました」とか「親戚にクリスチャンがいました」とか「海外で教会に行っていました」とか、誰か他の人が種を蒔いてくれていて、私たちはその収穫の実にあずかっていることがほとんどです。私たちは、他の人が労苦してくれていたからこそ、収穫の恵みにあずかることができるのです。

私たちは、「収穫の時期」もあれば、「種蒔きの時期」もあります。収穫は喜びの時ですが、種蒔きの時期は苦労も多く涙の時です。しかし私たちの種蒔きは、決して空しいものではありません。たとえ自分たちが収穫できなくても、いつか必ずどこかの誰かが収穫してくれる

のです。「神様の畑」はそういうものです。私たちは、家族の救いや地域の救いを願っているでしょう。そして今は「収穫の時期」ではなく「種蒔きの時期」かもしれません。しかし蒔いた種は、必ずいつかどこかで収穫の時が来るのです。だからこそ、私たちは「種蒔きの時期」でさえも、喜びを持つことができるのです。イエス様は、36節で**「それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです」**と言われました。「神の畑」に仕える私たちは、「収穫の時期」も「種蒔きの時期」も、信仰によって喜ぶことができます。

イエス様は、「目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています」と言われました。私たちは、信仰の目を開いて、「神の畑」を見ていきましょう。そうすれば、たとえ「種蒔きの時期」でも、「神の畑」は色づいて見えるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは以前、なくなる食べ物のために生きていました。たとえお腹は満たされても、心や魂は満たされませんでした。あなたは、私たちをこの地上に遣わし、一人ひとりに使命を与えています。私たち一人ひとりがこの地上に成し遂げるべき使命を見出すことができますように。生涯の最後まで、その使命に生きることができますように。

また私たちはいつでも、信仰によって「神の畑」を見ることができますように。私たちは、喜びの収穫の時だけでなく、涙の種蒔きの時も過ごします。どうか私たちが信仰の目を開いて、「神の畑」を見て、たとえ涙の種蒔きの時でも喜びを見出すことができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。